

# 漢詩の指導について

田 中 俊 弥

## 一 はじめに

私は教職について今年で四年めになります。これまで高Ⅰの国語Ⅰを三年つづけて担当し、今年はじめて高Ⅱの国語Ⅱを受け持っています。漢詩の指導については、何編かの詩を読解したり、訳詩をつくらせたりして来たのですが、詩というものの扱いのむずかしさを感じ、単元としてのまとまりに見通しが持てなかったために踏み込んだ扱いをして来ていません。このたび国語Ⅱを担当し、漢詩をまとまったかたちで扱う機会を得たので、そのときの授業を報告し、あわせてその授業を通じて考えたことや課題として残ったことなどについて述べていきたいと思います。

## 二 授業報告

これまで国語Ⅰにおいて、漢文訓読のきまりを教え、三、四編の故事成語の文章を扱った後に、「史記」の鴻門の会と四面楚歌

とをやや時間をかけて読解していくことを私は通例として来ました。漢詩の指導については教育実習生に担当してもらっていました。現在私が受け持っている高Ⅱのクラスの生徒は高Ⅰからの持ち上がりのもが多く、漢詩をまとまったかたちでは読んで来ていません。以下、この四月から高Ⅱのクラスで行って来た授業について報告したいと思います。

### 〈指導の経緯〉

#### 第一次（3時間）

孟浩然「春暁」、李白「静夜思」、李白「黄鹤楼送孟浩然之广陵」、杜甫「春望」、白居易「香炉峰下」五首をのせたプリントを配布し、絶句・律詩の形式を理解させるとともに、漢詩の世界にふれた。また、岑参「磧中作」、杜甫「登高」の二首をプリントし、転句と対句の役割について確認した。

#### 第二次（3時間）

杜甫「絶句」、王维「送元二使安西」、李白「送友人」の三首について、漢詩の形式を確認するとともに、その読解と鑑賞をした。

### 第三次（1時間）

NHK放映の「シルクロード」（旅情篇）と「大黄河」（悠久なる旅）のビデオを視聴させ、漢詩の風土におもいをはせさせた。

この授業は、1 漢詩の形式を理解させること、2 音読・暗誦などにより漢詩の韻律に親しませること、3 漢詩の表現を理解し味わうことにより漢詩の世界に親しませることを目標として行って来たものでしたが、生徒の反応はいたって低調で、指導者による一方的な解説に終始してしまいました。考えてみれば、この失敗は当然といえば当然のこと、形式についての知識的な理解が先行し、内容面からの切り込みが出来ていないのです。この指導を通じて強く感じたことは、本当に漢詩に親しみを持たせ、漢詩を学習していく力を育てていくにはどうすればよいのか、別の言い方をすれば、生徒の何に切り込んでいけば、生徒が漢詩の世界に親しみ、自ら学習していく契機を持ちうるのだろうかということです。

そこで、漢詩指導の原点である、「漢詩に親しませる」という目標について、あらためて考えてみたいと思います。

### 三 漢詩への親しみ

生徒の履修している明治書院の「精選国語Ⅰ」の教科書には、「王之渙」登鶴鶴樓、「孟浩然」春曉、「王維」送元二使安西、「李白」春夜洛城聞笛」が漢文に親しむという単元に収められ、

中国の韻文として王維「鹿柴」、劉禹錫「秋風引」、李白「蛾眉山月歌」、張繼「楓橋夜泊」、杜牧「山行」、杜甫「登岳陽樓」、「登高」、白居易「八月十五日夜對月憶元九」、元稹「聞白樂天左降江州司馬」の諸詩が載せられています。そして、「精選国語Ⅱ」には、中国の詩文として「詩經」の「桃夭」、「采芣詩集」の「薤露歌」、「古詩賞析」の「上邪」、「文選」の「沼澤牽牛星」、「樂府詩集」の「勅勒歌」、陶淵明「飲酒」の古詩が収められています。

これらの教材はいずれも格調高く、教材的にも価値のすぐれたものです。しかし、教科書に載せられているままに扱っていくことには、躊躇せざるを得ません。どうも、とっつきにくさとか、扱いのむずかしさを感じてしまいます。このことは、私自身が学習の観点というか、指導の見通しとかいうものをつかめていないことに原因があります。たとえば、王維の「鹿柴」とか張繼の「楓橋夜泊」とかは、ムードとしてはわかるのですが、いざ読解指導となると、どう扱っていけばよいのか、どういう主題に収斂していけばよいのか、これらの詩を生徒に与えていく積極的な動機が自分自身の中に持てないのです。

そこで、自らの漢詩への親しみについて内省し、学習の観点なり、指導の見通しなりに考えてみたいと思います。

私の場合、漢詩への親しみということでは、訓読文の韻律や調子のよさによるところがとて大きかったですように思います。意味や内容が具体的につかめていなくても、なんとなくこの詩が好きだなあというものが多いのです。たとえば、杜牧の「江南春」

は、「南朝四百八十寺、多少樓台煙雨中」という詩句がいかにも心地よく、はっきりとは意識できないけれど杜牧の詩の世界に誘われていくのです。

次に、漢詩全体の意味はさておき、自分の非常に気に入った詩句を見つけて、漢詩に親しみを覚えたことが多かったように思います。たとえば、古詩の「行行重行行」とか武帝の「秋風辞」の「欲棄極兮哀情多」とかの詩句は、その調子とともに印象深く残っているものです。また、李白の「孤帆遠影碧空尽、唯見長江天際流」の詩句は、はるかに眼前に広がる情景とともに忘れがたいものですし、王維の安倍仲麿を送った詩の一節、「鰲身映天黑、魚眼射波紅」は、二人の友人関係を知るきっかけともなり、「黒」と「紅」の色彩の対比や表現されている素材によって脳裏に深く刻まれています。

ところで、考えてみると、これらは、直感的というか、感覚的な印象によって漢詩に興味を覚え、親しみを感じたケースです。たしかに、漢詩の簡潔な表現にこめられた情感豊かなイメージの世界に触発されたものですが、そのことに対しては意識的ではなく、単なるおもしろい込みにすぎず、誤った解釈をしている場合が少なくありません。

それに対して、ていねいな学習を通して、あらためて漢詩の表現の巧みさというか、詩の味わい深さに驚き、漢詩に親しみを覚えた場合があります。たとえば、李白の「静夜思」とか杜甫の「春望」などがその例です。李白の詩の場合、彼がなせ地上にふりそそぐ月の光に気付き、なにゆえに月を仰ぎ見たあとに頭を低

れて故郷をおもっているのかということについて学習してはじめて、この詩のよさというものがわかって来ます。そして、漢詩の味わいに興味を覚えるのです。杜甫の「春望」の場合、冒頭の二句は、読めば一通りは理解できるのですが、この表現に杜甫がどのようなおもしろいを込めていたのかということに對句構造に着目して学習してこそ、漢詩表現の奥深さというものを感ずることができるとは思います。

以上は、学習の有無という観点によって区別してきたのですが、このこととは別に、漢詩に興味を覚え、親しみを感じた場合のことについて視点をかえて述べてみたいと思います。

その一つは、漢詩ならではのものの見方や感じ方に刺激を受けて、興味や関心を抱いた場合です。たとえば、岑參の「磧中作」に見られる天と地に対する認識は非常に新鮮なものでしたし、さきの李白の「静夜思」にも見られる中国人の月に寄せるおもしろい詩情豊かで日常の自分の認識をあらたにさせるものでした。それからもう一つは、中国の風土というものに興味をひかれ、悠久でかつ広大な自然をうたった詩に親しみを覚えた場合です。

いうならば、この二つのことは、異質な世界との出逢いによって日常の認識が動きかされることによって興味・関心がひき起こされた場合といえます。

また、このこと以外に、別離の情や戦争の苦しみなどへの共感を通じて、かわらぬ人間の姿を感じて漢詩の世界に親しみを感じた場合や、李白や杜甫などのようにその人柄や詩風に興味を覚えて漢詩に向かった場合などもあります。そしてまた、項羽の「垓

「下歌」や白楽天の「長恨歌」のように歴史とのかかわりの中でいきいきと詩の世界を想い浮かべ、漢詩の魅力を感じた場合などがあります。

以上、こまごまと私の体験をふりかえって漢詩への親しみという点について述べてきましたが、親しみのありようはさまざまなのです。要は、親しみの質をきちんと見きわめたいというだけ、学習の観点や指導の見通しなどはたてられないということ、指導者は、生徒にどのような点から親しみをもちたいとされているのかをしっかりと持ち、その段階に応じて指導の手立てを工夫していく必要があります。その方向としては、一つには、感賞的などころから認識的などころへ生徒の興味を深化・拡充させていく指導が考えられねばなりません。また、どうかたちで漢詩に出逢わせるのかということも重要なポイントになってくると思います。

次に、漢詩の特質をふまえ、漢詩指導の要点について考えてみたいと思います。

#### 四 漢詩指導の要点

私は、漢詩指導の要点として三つのことを考えています。

- 1、漢詩の形式についてしっかりと知識や理解をもたせること
- 2、音読や暗誦を重視すること
- 3、詩の指導であるということを意識すること

まず、第一の点について述べたいと思います。漢詩は、心情や情景を凝縮した表現によって形式の上から立体的に構成している点に最大の特徴があると考えます。そういう点で、漢詩の形式について確かな知識や理解をもたせることは、読解指導においてのみならず、自らが漢詩に向かっている場合においても重要なことがらだと考えます。なぜならば、句のでき方（五言であれば三字三字、七言であれば二字二字三字の原則）を知り、対句の構造や句ごとの相互関係や構成について理解しておくことは、漢詩に対する抵抗感を和らげ、とかく日本語の文章と同じように線条的に読んでしまいがちな漢詩を立体的に読んでいく姿勢を形成し、正しい漢詩の理解に向かわせることができるからです。従来、このことはあまり意識されて来なかったことではないかと思いますが、単に形式的な知識に終わるのではなく、読みに結びつけたかたちでこれからはもっと重要視していく必要があると考えます。

次に第二の点についてですが、このことを要点と考えるのは「三」のところでも述べたように、音読や暗誦ということが深く漢詩への親しみということと結びついているからです。音読や暗誦を形式の理解にもつぎながら漢詩指導に幅広くとり入れていくことは、漢詩の読みをたしかで豊かなものにしていくと考えられます。

最後に、第三の点についてですが、このことはとりたてて言うまでもないことのように考えられます。しかし、実際には、漢詩を古典という目でまずとらえてしまうために漢詩も詩であるという点が忘れられやすく、詩の指導ということがあまり意識されて

いないように思います。漢詩も詩なのですから、作者の感動の中心をしっかりとらえ、多様な解釈を試みつつ、イメージ豊かに詩の世界や詩人のもの見方や生き方などを読みとっていくことが重要です。そして、そのことを通して、自己の感性を覚醒し、既存の認識を新たにしていけることが求められるべきだと考えます。

## 五 漢詩指導の工夫

最初にも述べたように、私自身は漢詩の指導に全くといってほど取り組んで来ていません。そこで、私が注目している四つの実践あるいは試みについてふれ、私自身が現在構想していることを述べてみたいと思います。

さて、四つの実践あるいは試みというのは次のものです。

その一つは、今回の学会で発表された宮崎の川越淳一先生の実践です。川越先生は、自らの大学での学習体験をかえりみ、生徒に自分の力で学ぶ喜びを感じさせることを目的に漢詩の演習の授業を試みておられます。グループごとに異なる漢詩一首を割り振り、研究テーマも指示し、いろいろな参考図書に生徒自身であたらせながら、一首の漢詩を班員の力で話し合いを通じて読解させ、その内容を自分達が作成したプリント資料にもとづいて発表させておられます。この演習形式の授業は、生徒自身を漢詩にたちむかわせ、班員相互の解釈をひき出し、交流させながら、深く漢詩の世界に生徒を導いている点で注目されます。また、生徒ひ

とりひとり主体的な学習者に育てていく試みとしても評価できると思います。今後、詩のとりあげ方や作業のさせ方などを検討し、演習形式による漢詩指導の可能性を更に開拓していくことを私自身の課題としてとらえていきたいと思っています。

次にとりあげたいのは、本校で取り組んできた「国語Ⅰ」における主題単元の試みです。詳細は、本校で刊行している『国語科研究紀要』第十四号、第十五号に記載されていますが、そのポイントとなる点は、ある主題のもとに、現代文・古文・漢文を総合的に学習させようというものです。その事例の一つとして、「戦争」という単元では、「コレガ人間デス」（原民喜）、「夏の花」（原民喜）、「敦盛最期」とともに、漢詩の「春望」（杜甫）、「涼州詞」（王翰）、「七哀詩」（王粲）の三首がとりあげられています。また、「自然―調和と融合」という単元では、「自然への回帰」（辻邦生）、「春はあけぼの」（田中澄江）、「五月の山里」（枕草子）とともに、「春曉」（孟浩然）、「尋胡隱君」（高啓）、「鹿柴」（王維）、「絶句」（杜甫）の四首の漢詩がとりあげられ、「自然の中に生きる」という題目でまとめの話し合い学習がおこなわれています。これらの試みは、往々として個別的に取り上げられてしまう漢詩を一連の授業の展開に位置づけ、学習者が漢詩へアプローチしていく筋道をはっきりさせている点で注目されます。このような学習者への切り込みは、漢詩も一つの言語表現として認識させるものであり、新たな視点を生徒に喚起させるものと考えられます。主題の設定や教材本文の取り上げ方、さらには単元の展開のしかたも考慮に入れ、ダイナ

ミックな漢詩指導を展開していくことが今後の実践の場でもっと追求されるべきだと思います。

そういう点では、本席にもいらっしやる秋元達也先生の「漢詩紀行を企画する」という構想は、とてもユニークで興味深いものと思います。生徒自身の手で旅行を實際に立案させ、その土地その土地にふさわしい漢詩をピックアップさせていく試みは、生徒の主體的な意欲を喚起し、漢詩を中国の風土の中にしっかりと位置づけて読解・鑑賞させていくものと考えられます。

最後に、現在鈴ヶ峰女子短期大学の教授でいらっしやる山本昭先生の漢詩のアンソロジーを作らせるといふ実践をとりあげたいと思います。この実践は、先生が附属高校に在職中になされたもので、「国語科研究紀要」の第十四号に「漢文を学ぶこと―学習者の視点から―」として報告されています。山本先生は高IIの漢文(二単位)の授業で、冬休みに各自好きな漢詩を選ばせて、それに語釈・口語訳・選んだ理由・感想などを一ページに書かせて提出させ、全員のをプリントして配布し、その後、各自に分類して自分のノートに貼らせ、コメントをつけたものを提出させています。先生は、この他にも杜牧の「江南の春」をはじめとして、杜甫の「兵車行」や「旅夜書懷」、李白の「月下独酌」や「将進酒」など数多くの漢詩に出逢わせ、年間で五十首近くを取り上げておられます。ある生徒の感想は次のとおりです。長文ですが引用させていただきます。

「漢詩も、確かに嫌いな詩の一つには違いありません。けれども、漢詩との出会いが、私の中に巣くっていた詩に対すると

んでもない偏見を打ち砕いてしまったのです。(中略引用者)ともかく、定型にはまりながらもその自由さ、精巧さ、全体としてのまとまり、いろいろな点において、漢詩はこれまでの私の考えていたものとは違う詩であったのです。

この一年間に、ずいぶんたくさん漢詩に出会いました。(中略引用者)どの詩もみなそれぞれ強烈なイメージ、美しい言葉を使い、思わずはっとしてしまうことが幾度となくありました。中でも、とりわけ私の心を強くゆさぶったのは、杜甫の詩でした。

杜甫がそうであるように、私は言葉をたいせつにしたいのです。李白がそうであるように、私は言葉によって自分を表現してみたいのです。人間である以上、一生言葉を使っていかなければなりません。新しい言葉に出会うことは、この先、いく度となくあるでしょう。私にはそれがとても楽しみです。まだ見ぬ友に会えるような喜びを感じています。

なんだか、漢文とはずいぶんかけ離れたことを書いているようになってしまいました。けれど、このようなことは感々を起こさせてくれたのも、新しいことばに出会う喜びを気づかせてくれたのも、この一年間に出会った五十首たらずの漢詩でした」

この感想に対し、山本先生は、「漢詩の内奥」にまで致らしめたものは何かと考察し、一つは「漢詩をくりかえし読ませた書き下し文の美しさ」であり、もう一つは「魅力のある日本語の詩でありながら、一読して明快でない点」「訓読語という、われわれの

日常の言語とは適度の距離をもったことばである点」ではないかとされています。ここには、漢詩のことばの世界が豊かに用意され、学習者がことばと出会う場や古典の世界に自由に飛翔する「遊び」の場が設定されているのです。漢詩指導の幅広い領野が示されている点が注目すべき取り組みとします。

以上の四つは、いずれも学習者と漢詩とのかわりをしっかりとらえたものとして多くのことを示唆しています。今後、これらの取り組みに学びつつ、漢詩指導を確かであり多いものにしていかねばなりません。

そこで、私自身が現在考えていることについて、二つのことを述べてみたいと思います。

一つは、漢詩を物語やドラマのなかにおいてみる試みです。たとえば、李白の「子夜呉歌」ならば、夫の帰還を待つ妻が「長安一片月」をどのようなおもいで見ているのか、またどうしてそういうおもいになるのかなど、さまざまに想像させつつ、詩の世界を一つの物語あるいはドラマと見、簡潔な短文を重ねつつ、自分の詩の読みとりを一つのストーリーをもった文章として表現させてみたいと思っています。このことは柳宗元の「江雪」や杜甫の「絶句」などその他のさまざまな詩においても可能なのではないかと思えます。凝縮された表現の背後にある詩の世界や人間のドラマをいきいきととらえさせる表現指導もかねた試みを是非実践してみたいと思っています。

もう一つは、漢詩読本をつくる試みです。私は、生徒に多くの詩に出逢わせ、その中で一つでも多くの自分の気に入った詩や詩

句を見出せたいとかねてから思っています。そのとき、現在の教科書に掲載されている詩の数や配列のしかた、あるいは詩のとりあげ方について不満を覚えます。私としては、もっと数もふやし、さまざまなテーマごとにくつもの詩を配列したいと思えます。また、その場合には、訓読文をふんだんに取り入れながら、ところどころには課題を用意したり、ときには通釈的な口語訳も盛りこみ、もっとつつきやすい漢詩読本をつくってみたいと思っています。たぶん夢物語めきますが、これからの取り組みの中で少しでも実現させることが出来るなら、漢詩指導の新たな面もひらけてくるのではないかと思います。

## 六 おわりに

最後に、漢詩指導のめあてということで、私事で恐縮ですが、父の話と兄の話を記してこの報告を終えたいと思います。どちらもずいぶん前のことですが、父からある掛軸の読み方をたずねられたことがあります。掛軸には、均整のとれた美しい書体で、「朝辭白帝彩雲間千里江陵一日還兩岸猿聲啼不盡輕舟已過萬重山」と書かれていました。私はその字数を数え、七言絶句だと判断し、七字で区切りながら、文字を追う意味をたどりました。そして、後日、辞書に当たり、それが李白の「早發白帝城」であることを見出しました。父に大意を話し、あらためて句のまとまりを意識しながらその軸を見ると、詩の世界が開けてくるように感じられました。私は、このことを通して、漢詩についての知識の

大切さを認識し、父にもそのような手立てが思い浮かべばどんなにかよかっただろうかと思っただけです。もうひとつは、家族でテレビを見ていて、NHKの大河ドラマ「山河燃ゆ」の題字が画面に映し出された時のことです。兄は、すかさず「国破れて山河在り、城春にして草木深し」の詩句を口ずさみました。そのころ、兄は高校の機械科を卒業し、造船所の資材課に勤めていました。そんな兄からこのことばを聞いたので、私はついぶん驚き、杜甫の詩句が兄の脳裏に刻まれていることに漢詩の力というものを感じました。兄はついぶん得意そうに披露したわけですが、たぶん兄は杜甫がその句にこめた深い意味までは意識していなかっただろうと思います。私は、戦乱のなかに生きた杜甫の感慨が兄の印象の中にしっかり息づいていたらどんなにすばらしいことだろうかと思いました。

この二つのことは、私が漢詩指導を実践していくめあてを示唆するものとして、とても大切に思っています。漢詩が一人の人生にかかわっていくところを見えつつ、今後の漢詩指導の実践に向かっていきたいと思っています。

(広島大学附属高等学校教諭)